

対人ストレス・コーピング尺度の改訂と妥当性の検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 高本 真寛

筑波大学人間系 松井 豊

A revision of the coping scale for interpersonal stress events and its validity

Masahiro Takamoto (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study revises the Coping Scale for Interpersonal Stress Events, and evaluates its validity. The revised scale consists of the following subscales based on coping goals: problem-focused coping, emotion-focused behavioral coping, and emotion-focused cognitive coping. Firstly, in order to improve validity, some expressions were revised and some items were added based theoretical considerations. Subsequently, the revised scale was administered ($N = 218$) and analyzed through both exploratory factor analysis and confirmatory factor analysis to confirm the internal structure of the subscales. Correlations analyses also confirmed the relations between the Revised Coping Scale for Interpersonal Stress Events and several theoretically relevant scales. These results indicate that the revised scale and its three subscales are valid for measuring interpersonal stress coping.

Key words: coping, scale, validity, interpersonal stress events

本研究は高本・相川（2012）が開発した“対人ストレス・コーピング尺度”の改訂と妥当性の検討を目的とする。

トランスアクション理論（Lazarus & Folkman, 1984; 本明・春木・織田監訳1991）の提唱以来、コーピングはストレスの緩衝要因として位置づけられ、数多くの研究が行われている（Aldwin, 2007; Folkman, 2011など）。また、コーピング研究の主目的はストレスフルな問題やネガティブな情動に対する適切なコーピングの特定にある。つまり、コーピング研究は、不適切な行動の行動変容を目的とした介入に関する知見を提供し得るものであり、この点にコーピング研究の意義があると理解されている（Somerfield & McCrae, 2000）。

コーピングの定義は研究者間で必ずしも一致していないが、Lazarus & Folkman（1984 本明他監訳1991）による定義を引用するか参考にした研究が多く見られる。一方、コーピングの下位分類は、先行

研究やコーピングを測定する尺度によって様々であり、現在のところ一貫性が見られていない（e.g., Carver, Scheier, & Weintraub, 1989; Endler & Parker, 1990; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995）。そのため、研究間における知見の比較が困難であり、コーピング研究の問題点としてしばしば指摘されている（Aldwin, 2007; Folkman & Moskowitz, 2004）。コーピングを包括的に分類する代表的な基準には、Latack & Havlovic（1992）や神村他（1995）による基準が挙げられるが、近年ではSkinner, Edge, Altman, & Sherwood（2003）によって新しい分類も提案されている。

高本・相川（2012）は、上述したコーピング研究における下位分類の非一貫性の問題に加えて、従来の尺度は個人がコーピングを行使する際の意図を明確にしないままに測定しているという問題点を指摘している。コーピングの行使意図を考慮せずに測定すると、行使意図が混在することでコーピングの下

位分類の再現性が低くなることや構成概念外の分散 (construct irrelevant variance) の汚染による妥当性の低下の問題が指摘される。そのため、高本・相川 (2012) では、この二つの問題点を考慮し、個人の行使意図を明確にする方法として“教示文による明確化”を提案し、対人ストレス・コーピングを包括的に測定する“対人ストレス・コーピング尺度”の開発と妥当性の検討を行っている。

“対人ストレス・コーピング尺度”は、Latack & Havlovic (1992) によるコーピング分類を参考にして作成されており、“問題焦点型対処” (対人ストレスイベントを解決するために、問題に対して能動的に対処する方略)、“情動焦点型行動的対処” (対人ストレスイベントの解決を志向するのではなく、行動によってネガティブな情動反応の低減を目的とする方略)、“情動焦点型認知的対処” (対人ストレスイベントの解決を志向するのではなく、認知によってネガティブな情動反応の低減を目的とする方略) を測定する3下位尺度で構成される。また、下位尺度のうち、問題焦点型対処尺度では方法 (認知・行動) カテゴリが、情動焦点型対処の2下位尺度では形態 (接近・回避) カテゴリが、それぞれ下位次元として想定されている (Table 1)。

国内において Latack & Havlovic (1992) と類似したコーピングの分類を試みた研究には、神村他 (1996) の TAC-24 (Tri-axial Coping Scale-24) が挙げられる。TAC-24は(1)かかわる対象の違い、(2)かかわり方、(3)機能する反応系の違いという三つの軸に基づいて分類される。神村他 (1992) による分類基準は、鈴木 (2004) が構造方程式モデリングを用いて、3次元モデルによる分類の妥当性を確認している。この分類基準と Latack & Havlovic (1992) が提案した、(1) 焦点 (問題・情動)、(2) 方法 (認知・行動) による分類軸とそれぞれのコーピングを“統制/逃避”で構成し、さらに行動によ

るコーピングを“社会/孤立”で構成するという分類基準との間には高い共通性が見られる。従って、Latack & Havlovic (1992) による分類基準は、コーピングを包括的に捉えるものとして妥当であると判断される。

一方、Latack & Havlovic (1992) による分類と対人ストレス・コーピング尺度の構成 (Table 1) を比較すると、両者の大きな相違は、問題焦点型対処の下位分類に回避型コーピングを設定するか否かにある。Latack & Havlovic (1992) は、問題焦点型対処の下位分類に回避型コーピングを含めているが、問題焦点型対処は本来、接近型コーピングを表すコーピングである。従って、問題焦点型対処に回避型コーピングを含めることは同尺度の定義と矛盾する。そのため、対人ストレス・コーピング尺度における問題焦点型対処は接近型コーピングのみを含み、“方法 (認知・行動)” カテゴリによって構成されている。一方、情動焦点型対処は“方法 (認知・行動)” カテゴリで異なる下位尺度が設けられ、それぞれの下位尺度は“形態 (接近・回避)” カテゴリで構成されている。

以上のことから、対人ストレス・コーピング尺度は、Latack & Havlovic (1992) による分類基準との間に高い対応関係・共通性を有していることがうかがえる。従って、対人ストレス・コーピングにおける構成概念の代表性 (domain representativeness) は確保されており、“内容的側面からの証拠”が保証されていると考察されている (高本・相川, 2012)。

また、上述した“対人ストレス・コーピング尺度”に関して、高本・相川 (2012) では限定的ではあるが“構造的側面からの証拠”“一般化可能性の側面からの証拠”“外的側面からの証拠”を支持する証拠が得られており、一定の妥当性のある尺度であると判断できる。一方、同尺度の一部の下位尺度において、尺度構造に関する再検討の必要性和一部の下

Table 1 高本・相川 (2012) の対人ストレス・コーピング尺度と Latack & Havlovic (1992) の分類基準との対応関係

		焦点	
		問題	情動
方法	認知 (Cognitive)	A ○問題焦点型対処尺度 ・状況把握 (認知)	B ○情動焦点型認知的対処尺度 ・肯定的解釈の側面 (接近) ・回避的思考の側面 (回避)
	行動 (Behavioral)	・積極的行動 (行動)	C ○情動焦点型行動的対処尺度 ・対人接近型行動 (接近) ・回避型行動 (回避)

位因子における信頼性を高める必要性という二つの課題も同時に指摘されている。特に第1の課題に関して、情動焦点型認知的対処尺度は、尺度作成段階において“肯定的解釈”（ストレスラーを肯定的に捉えることでネガティブな情動反応を低減しようとする方略）と“回避的な思考”（ストレスラーについて考えることを回避することでネガティブな情動反応を低減しようとする方略）という、“接近・回避”の下位次元を想定して作成されたが、統計的分析からは上記の下位次元を示す因子が導出されなかった。そのため、尺度の得点解釈に関する妥当性について再検討が望まれる。

そこで、本研究では高本・相川（2012）によって作成された“対人ストレス・コーピング尺度”の妥当性をさらに高めるために、尺度の改訂を行うとともに妥当性の検討を実施する。

なお、本研究において妥当性の評価は、近年広く普及が見られる妥当性の捉え方（American Educational Research Association & American Psychological Association & National Council on Measurement in Education, 1999; Furr, 2011）に依拠して行う。つまり、従来までの“内容的妥当性”“基準関連妥当性”“構成概念妥当性”の三つに区分した検討ではなく、妥当性を一つのまとまりとし、妥当性を示す諸側面について検討することで妥当性を評価する。また、妥当性を示す諸側面に関する分類は、AERA et al. (1999) による5側面に依拠する¹⁾。

上記の目的に関して、具体的には尺度の改訂を行い、“内的構造における証拠”（evidence based on internal structure）²⁾の検討および外的基準との相関

分析から“外的変数との関連における証拠”（evidence based on relations other variables）について検討する。なお、改訂作業の中で、本尺度が依拠するコーピング分類と項目内容の検討を通して、“テスト内容における証拠”（evidence based on test content）について改めて検討を行う。

目 的

対人ストレス・コーピング尺度の妥当性を高めるために必要な改善点は、（1）情動焦点型認知的対処尺度における“形態（接近・回避）”ごとの得点解釈を可能にすること、（2）下位尺度の信頼性を高めることの2点に集約できる。そこで、上記の2点が改善されるように尺度を改訂し、妥当性に関する評価のうち、“内的構造における証拠”“外的変数との関連における証拠”について検討を行う。

上記の目的のうち、“外的変数との関連における証拠”を検証するために、第1に高本・相川（2012）と同様に楽観性を取り上げる。楽観性とは“物事がうまく進み、悪いことよりも良いことが生じるだろうという信念を一般的にもつ傾向”と定義される（戸ヶ崎・坂野, 1993）。また、楽観性は問題への直接的な対処および肯定的再解釈との間には正の関連が示されている（川人・大塚, 2010; Nes & Segerstrom, 2006）。従って、問題焦点型対処のうち積極的行動は対人ストレスイベントに対する直接的な対処であるため、楽観性との間に正の相関関係が想定される。加えて、本研究における情動焦点型認知的対処のうち“肯定的解釈”の側面は楽観性と概念的類似性が高い。そのため、“肯定的解釈”の側面と楽観性は積極的行動よりも強い相関関係にあると考えられる。

一方、問題焦点型対処のうち、状況把握は対人ストレスイベントの客観的把握を目的としたコーピングであり、コーピングの中でも前駆的方略として位置づけられる。従って、状況把握は楽観性をはじめとする個人特性との間に有意な相関関係は見られないと考えられる。

また、楽観性は既述したように物事を楽観的に捉える傾向を示している。そのため、楽観性の高い個人は対人ストレスイベントについて考えることを回避することでネガティブな情動反応を低減しようとするコーピングを行使しない傾向にあると考えられる。従って、情動焦点型認知的対処尺度のうち“回避的思考”の側面は、楽観性と負の関連があることが推測される。そこで、坂本・田中（2002）が翻訳した改訂版楽観主義尺度（The Life Orientation

1) 高本・相川（2012）は妥当性の評価を Messick（1995）に基づいて行っている。本研究で依拠する妥当性の分類と比較すると、Messick（1995）における“構造的側面からの証拠”は AERA et al. (1999) における“内的構造における証拠”と、“一般化可能性の側面からの証拠”と“外的側面からの証拠”は“外的変数との関連における証拠”と対応する。また、本研究で扱う妥当性の諸側面と従来までの妥当性の区分では、“テスト内容における証拠”は“内容的妥当性”と、“外的変数との関連における証拠”は“基準関連妥当性”と対応し、“内的構造における証拠”は“構成概念妥当性”の一部と対応する。

2) “内的構造における証拠”とは、テスト項目およびテストの構成要素と構成概念との関連の程度から検討される妥当性の側面を示す。また、構成要素がそれぞれ等質であることを示すことも要件に含まれる。従って、内的整合性を表す α 係数は、信頼性だけではなく“内的構造における証拠”を表す指標としても利用することができることになる。

Test: LOT-R) を使用して上記の関係性について検討を行う。

第2に、他者依存欲求について取り上げる。竹澤・小玉(2004)は他者依存欲求を“是認、支持、助力、保証などの源泉として他者を利用しないし頼りにしたいという欲求”と定義している。ここで他者依存欲求とコーピングの分類基準のうち、“接近-回避”次元との関連性について検討する。まず、情動焦点型行動的対処尺度の下位因子である“対人接近型行動”は接近型コーピング、“回避型行動”は回避型コーピングに該当する。また、両因子の項目内容から、“対人接近型行動”は他者の存在や相互作用に対する動機づけが高く、“回避型行動”は動機づけが低いことが推測される。従って、対人依存欲求尺度の下位因子である“情緒的依存欲求”との関連は、対人接近型行動との間に正の相関関係が、回避型行動との間に負の相関関係があると考えられる。そこで、竹澤・小玉(2004)によって作成され、妥当性の検討が行われている対人欲求尺度のうち、“情緒的依存”因子を使用して上記の関係性について検討を行う。

以上より本研究での仮説は以下のように設定した。

仮説1 問題焦点型対処のうち“積極的行動”は楽観性と正の相関関係にあり、“状況把握”は楽観性と有意な相関関係は見られない。

仮説2 情動焦点型認知的対処のうち“肯定的解釈”の側面は楽観性と正の相関関係にあり、その相関関係は“積極的行動”と楽観性との相関関係よりも強い。

仮説3 情動焦点型認知的対処のうち“回避的思考”の側面は楽観性と負の相関関係にある。

仮説4 情動焦点型行動的対処のうち、“回避型行動”と“情緒的依存欲求”は負の相関関係が、“対人接近型行動”と“情緒的依存欲求”は正の相関関係にある。

上記の四つの仮説について、尺度を改訂した上で統計的分析を用いて尺度の検討を行う。

方 法

尺度の改訂

前述した二つの改善点を満たすことを目的として、尺度項目の追加および項目の修正を行った。

第1の問題点に対する改善手続きは以下の通りである。まず、情動焦点型認知的対処尺度において“形態(接近-回避)”カテゴリが導出されなかった理由は、尺度作成における統計的分析の段階で“形態(接近-回避)”のいずれかで項目の多くが除外され

たことに起因すると考えられる。尺度を構成する項目を概観すると、“回避”に相当する項目数が少なかったため、新たに“回避”に相当する3項目を追加した。

第2の問題点に対する改善手続きは以下の通りである。多くの場合、信頼性は項目数を増やすことで高まることが指摘されている(池田, 1994)。そこで、項目数が少ない“状況把握”と“対人接近型行動”を対象にそれぞれ2項目ずつ追加した³⁾。

上記の修正は第1著者が各尺度と因子の定義と照合したうえで行った。その後、社会心理学を専攻と第2著者が確認した。

以上の手続きを通して尺度の改訂を行い、問題焦点型対処尺度14項目、情動焦点型行動的対処尺度11項目、情動焦点型認知的対処尺度12項目の計37項目で構成される改訂版尺度の原案を作成した。

調査対象と実施方法

2011年9月、10月と2012年2月中旬に関東近郊のA、B大学に在学する大学生を対象に、講義時間内および個別依頼によって調査を実施したところ、218名(男性96名、女性118名、不明4名; $M=20.40$ 歳, $SD=1.09$; 有効回答率95.11%)から有効回答を得た。

質問紙の構成

1. フェイスシート 学年・年齢・性別の記入を求めた。

2. 楽観性: 坂本・田中(2002)によって翻訳されたLOT-Rの10項目を使用した(5件法)。LOT-Rに関して、坂本・田中(2002)では“楽観性”と“悲観性”という2因子構造を提案している。しかし、坂本・田中(2002)では1因子構造での解釈も十分に許容される結果が得られている。そこで本研究では、1因子構造として扱う。

3. 情緒的依存欲求: 竹澤・小玉(2004)によって作成された対人欲求尺度のうち、“情緒的依存欲求”因子10項目を使用した(6件法)。

4. コーピング: 高本・相川(2012)が作成した“対人ストレス・コーピング尺度”を改訂した37項目を使用した。過去1ヵ月内に経験した対人ストレスイベントに対して実際に行使したコーピングについて

3) 加えて、“回避型行動”の項目のうち、“気持ちが落ち着くのを待った”を“何もせず気持ちが落ち着くのを待った”に修正することで、問題に対して積極的な対処をしないという内容をより明瞭に示すように修正した。

回答するよう教示し、4件法で回答を求めた。

結果と考察

楽観性と情緒的依存欲求

LOT-R、情緒的依存欲求尺度に関して、主成分分析を用いて1次元性の確認を行った。その結果、LOT-Rでは負荷量の絶対値が.281から.776であり、(累積寄与率42.481%)、 α 係数は $\alpha = .712$ であった⁴⁾。一方、情緒的依存欲求尺度では負荷量は.569から.755を示し(累積寄与率45.305%)、 α 係数は $\alpha = .860$ であった。

問題焦点型対処尺度

積極的行動と状況把握を測定するために用意した項目(それぞれ8項目と6項目)を対象に探索的因子分析(Exploratory Factor Analysis: EFA)を実施した(主成分解・promax回転:以下同様の方法を選択)。分析において、“今の自分の状況について周りの人に聞いた”“何をしたらよいか友人に相談した”という他者に対するはたらきかけを表す項目が結果の解釈可能性を減じていたため、分析から除外して再度分析を行った(Table 2)。

第1因子は自身のおかれた状況を把握しようとする

る7項目(“状況を客観的に見ようとした”など)で、第2因子は対人ストレスイベントに対する直接的なはたらきかけを表す5項目(“相手と積極的に話をするようにした”など)で構成されていた。上記の2因子と事前に想定した“方法(認知-行動)”カテゴリを対応させると、第1因子が“認知”に、第2因子が“行動”に対応する。従って、第1因子を状況把握、第2因子を積極的行動とした。 α 係数は状況把握で $\alpha = .839$ 、積極的行動で $\alpha = .742$ であった。つづいて、探索的因子分析の結果をもとに確認的因子分析(Confirmatory Factor Analysis: CFA)を行ったところ、適合度指標は $GFI = .887$ 、 $AGFI = .834$ 、 $CFI = .887$ 、 $RMSEA = .093$ であった。なお、潜在変数からの影響指標は.439から.748、潜在変数間の相関係数は $r = .757$ であった。

情動焦点型行動的対処尺度

回避型行動と対人接近型行動を測定するために用意した項目(それぞれ6項目と5項目)を対象に探索的因子分析を実施した(Table 3)。その結果、第1因子は他者との相互作用を通してネガティブな情動反応を低減しようとする内容を表す5項目(“周りの人に慰めてもらおうとした”など)で、第2因子は他者とのかわりを回避することでネガティブ

Table 2 問題焦点型対処尺度のEFA結果

No.	質問項目	因子	
		1	2
状況把握 ($\alpha = .839$)			
10	状況を客観的に見ようとした	.897	-.299
4	様々な面から問題を考えるようにした	.754	-.047
11	どこに問題があるのかを考えた	.669	.075
5	自分の過去の経験を参考にした	.497	.076
6	相手の立場になって考えるようにした	.470	.256
14	問題を解決するための方法を考えた	.465	.289
13	やらなければならないことを考えた	.461	.243
積極的行動 ($\alpha = .742$)			
1	相手と積極的に話をするようにした	-.110	.772
7	状況を変えようと努力した	.071	.643
2	自分から謝った	-.135	.631
3	相手のことをよく知ろうとした	.237	.537
8	相手に自分の意見を言うようにした	.019	.427
因子間相関		1	2
		—	.646

- 4) 分析の結果、1項目において負荷量が-.281と十分な数値が得られなかった。しかし、該当項目は坂本・田中(2002)においてもほぼ同様の数値を示していることから、本研究では項目として採用することとした。

な情動反応を低減しようとする内容を表す6項目(“相手と距離をとるようにした”)で構成されていた。上記の2因子を事前に想定した“形態(接近-回避)”カテゴリと対応させると第1因子は“接近”に、第2因子は“回避”に対応する。従って、第1因子を対人接近型行動、第2因子を回避型行動とした。 α 係数は対人接近型行動で $\alpha=.822$ 、回避型行動で $\alpha=.688$ であった。探索的因子分析の結果をもとに確認的因子分析を行ったところ、 $GFI=.888$ 、 $AGFI=.824$ 、 $CFI=.841$ 、 $RMSEA=.113$ という適合度指標が得られた。また、高本・相川(2012)と同

様に項目11と項目7において、誤差分散に相関を仮定することについてLM検定を行ったところ、有意な差が認められた(LM検定: $\Delta\chi^2(1)=13.648$, $p<.05$)。なお、潜在変数からの影響指標は.290から.866、潜在変数間の相関係数は $r=.166$ であった。

情動焦点型認知的対処尺度

肯定的解釈と回避的思考を測定するために用意した項目(それぞれ5項目と7項目)を対象に探索的因子分析を実施した(Table 4)。その結果、第1因子はストレスラーについて考えることを回避しよう

Table 3 情動焦点型行動的対処尺度のEFA結果

No.	質問項目	因子	
		1	2
対人接近型行動 ($\alpha = .822$)			
9	周りの人に慰めてもらおうとした	.861	.015
8	周りの人に自分の気持ちを分かってもらおうとした	.860	-.093
3	話を聞いてもらって、気持ちを落ちつけようとした	.812	-.083
4	誰かと一緒にいるようにした	.720	-.103
11	友人と遊んで気を紛らわせようとした	.533	.294
回避型行動 ($\alpha = .688$)			
10	相手と距離をとるようにした	.055	.776
1	相手と適度な距離を保とうとした	-.011	.717
2	何もなかったかのようにふるまうようにした	.042	.594
6	一人になるようにした	-.207	.552
7	他のことで気を紛らわせようとした	.280	.538
5	何もせず気持ちが落ち着くのを待った	-.187	.536
因子間相関		1	2
		—	.155

Table 4 情動焦点型認知的対処尺度のEFA結果

No.	質問項目	因子	
		1	2
回避的思考 ($\alpha = .706$)			
3	大した問題ではないと思うようにした	.758	-.133
5	他のことを考えるようにした	.641	-.106
2	自分のせいではないと思うようにした	.623	-.313
9	自分は自分、人は人と思うことにした	.604	.093
8	時間が解決してくれると思うようにした	.548	.171
4	今後はよいこともあるだろうと考えるようにした	.497	.318
11	気のせいだと思い込むようにした	.459	.179
肯定的解釈 ($\alpha = .696$)			
7	この体験は今後の役に立つ経験になると思った	-.165	.820
12	相手の良いところを探そうとした	-.098	.764
10	今の状況を受け入れるようにした	.111	.666
1	自分なら対処できると思うようにした	.320	.540
因子間相関		1	2
		—	.125

とする内容を表す7項目（“大した問題ではないと思うようにした”など）で、第2因子は肯定的に捉えることでネガティブな情動反応を低減しようとする内容を表す4項目で構成されていた。上記の2因子を事前に想定した“形態（接近・回避）”カテゴリと対応させると第1因子は“回避”に、第2因子は“接近”に対応する。従って、第1因子を回避的思考、第2因子を肯定的解釈とした。 α 係数は回避的思考で $\alpha=.706$ 、肯定的解釈で $\alpha=.696$ であった。探索的因子分析の結果をもとに確認的因子分析を行ったところ、 $GFI=.878$ 、 $AGFI=.813$ 、 $CFI=.724$ 、 $RMSEA=.115$ 、 $AIC=212.944$ という適合度指標が得られた。なお、潜在変数からの影響指標は.437から.645、潜在変数間の相関係数は $r=.189$ であった。また、“肯定的解釈”と“回避的思考”は互いに排斥するコーピングであるため、1因子構造の可能性も想定される。そこで、1因子構造を仮定した確認的因子分析を実施したところ、適合度指標は $GFI=.789$ 、 $AGFI=.683$ 、 $CFI=.498$ 、 $RMSEA=.154$ 、 $AIC=313.592$ であり、2因子構造を支持する結果が得られた⁵⁾。

“外的変数との関連における証拠”の検討

対人ストレス・コーピング尺度の“外的変数との関連における証拠”を検証するために相関係数を算出した（Table 5）。なお、以下では信頼性係数に α 係数を使用して“希薄化の修正”を行った相関係数に基づいて考察を行う。

仮説1に関して、積極的行動は楽観性との間に有意な正の相関が見られ（ $r=.163$, $p<.05$ ）、状況把握

と楽観性との間に有意な相関は見られなかった（ $r=.048$, $n.s.$ ）。以上の結果より、仮説1は支持された。

仮説2に関して、まず、肯定的解釈と楽観性との間には有意な正の相関が見られた（ $r=.295$, $p<.001$ ）。つづいて、楽観性と積極的行動、肯定的解釈との相関係数について、相関係数の差の検定を行った。その結果、楽観性と肯定的解釈との相関係数（ $r=.295$ ）は、楽観性と積極的行動との相関係数（ $r=.163$ ）よりも有意に大きかった（ $CR=6.554$, $p<.01$ ）。従って、仮説2は支持された。

仮説3に関して、回避的思考と楽観性との間には有意な相関は見られず（ $r=.045$, $n.s.$ ）、仮説3は支持されなかった。

仮説4に関して、回避型行動および対人接近型行動と情緒的依存欲求との間には、ともに有意な正の相関が見られた（それぞれ $r=.157$, $p<.05$; $r=.558$, $p<.001$ ）。従って、対人接近型行動と情緒的依存欲求との間に正の相関が見られるという仮説は支持されたが、回避型行動と情緒的依存欲求との間に負の相関が見られるという仮説は支持されなかった。

全体的考察

本研究は対人ストレス・コーピング尺度の改訂と妥当性の検討を目的として検討を行った。

尺度の改訂に際し、対人ストレス・コーピング尺度が依拠するコーピング分類について改めて検討を行い、構成概念の代表性を確認した。その後、妥当性を高めるために項目の追加および修正を行い、妥

Table 5 対人ストレス・コーピング尺度および外的変数との相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
① 楽観性	—	.085	.119†	.037	.051	-.105	.208**	.032
② 対人依存欲求	.109	—	.111	.058	.469***	.121†	.102	.121†
③ 積極的行動	.163*	.139*	—	.583***	.289***	-.057	.643***	.059
④ 状況把握	.048	.068	.739***	—	.281***	.136*	.607***	.142*
⑤ 対人接近型行動	.067	.558***	.370***	.338***	—	.149*	.215**	.344***
⑥ 回避型行動	-.150*	.157*	-.080	.179**	.198**	—	.045	.436***
⑦ 肯定的解釈	.295***	.132†	.895***	.794***	.284***	.065	—	.189**
⑧ 回避的思考	.045	.155*	.082	.185**	.452***	.626***	.270***	—

註）左下：“希薄化の修正公式”による修正後の相関係数，右上：修正前の相関係数

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

- 5) “肯定的解釈”と“回避的思考”ごとに確認的因子分析を実施したところ、適合度指標はそれぞれ肯定的解釈で $GFI=.986$ 、 $AGFI=.932$ 、 $CFI=.969$ 、 $RMSEA=.102$ 、回避的思考で $GFI=.959$ 、 $AGFI=.917$ 、 $CFI=.922$ 、 $RMSEA=.071$ であった。

当性の諸側面の一つである“テスト内容における証拠”が保証されるように努めた。本研究では、高本・相川(2012)におけるコーピング分類に依拠しつつ、それぞれのコーピングの定義に基づいてトップダウン形式で尺度の改訂を行った。従って、十分にテスト内容における証拠”は十分に保証されていると考えられる。

“内的構造における証拠”に関する検討の結果、確認的因子分析からは3下位尺度で十分な適合度指標が得られなかった。一方、情動焦点型認知的対処では、互いのコーピングが排反する可能性を考慮し、それぞれ個別に確認的因子分析を行った。その結果、概ね十分な数値を得ることができた。しかし、一部の適合度指標(RMSEA)の数値が十分な数値ではなかったため、妥当性に関する解釈は慎重に行う必要がある。しかし、1因子構造よりも2因子構造を支持する結果が得られた。従って、情動焦点型認知的対処尺度における得点解釈に関する妥当性を高めるという目的を達成することができた。一方、尺度ごとの等質性については、一部の因子で α 係数が若干低い数値を示しているが、概ね許容される数値であった。従って、尺度の等質性は一定程度保証されていると考えられる。

本研究では“楽観性”と“情緒的依存欲求”を用いて、妥当性のうち“外的変数との関連における証拠”について検討を行った。楽観性との関連に関する三つの仮説のうち、仮説1と仮説2は支持されたが、回避的思考と楽観性との関連を示した仮説3は支持されなかった。仮説の導出段階において、楽観性は物事を楽観的に捉える特性であるため、回避的思考は行使しない傾向にあると予想した。しかし、たとえ楽観性が高い個人であっても、脅威性を高く評価したイベントには回避的思考を多く行使する可能性が考えられる。つまり、楽観性と回避的思考との関連を“認知的評価”が調整したために、有意な相関が見られなかった可能性が考えられる。一方、情緒的依存欲求との関連に関する仮説4は、対人接近型行動と情緒的依存欲求との間に正の相関があるという点は支持されたが、回避型行動と情緒的依存欲求との間にも正の相関が見られた。従って、回避型行動と情緒的依存欲求との関連については支持されなかった。仮説4が一部支持されなかった理由には、既述したように“認知的評価”の影響が考えられる。つまり、情緒的依存欲求が高い個人においても、対人ストレスイベントの重要性や脅威性を高く評価することによって、却って回避的行動を多く行使する可能性が考えられる。

その他、本研究では“外的変数との関連における

証拠”に関する検討を、 α 係数を用いた希薄化の修正公式を利用して行っている。ただし、希薄化の修正公式は、修正公式を構成する“測定誤差”“真値”“信頼性”の多義性によって一義的に捉えることができないことや α 係数を修正公式の推定値としてルーチン的に利用することができないという理論的・現実的な制約が指摘されている(南風原, 2002)ことをふまえると、方法論上の影響も考慮する必要があるだろう。また、本研究では改訂した尺度の構造に関する検討と“外的変数との関連における証拠”を同一データで検討している。平井(2001)は尺度構成と他変数との関連の検討を同一データで行うことで生じうる、一般化可能性の問題について指摘している。従って、本研究とは異なる標本を用いて“外的変数との関連における証拠”に関する検討を行う必要がある。

以上に示した妥当性に関する結果をまとめると、“テスト内容における証拠”は保証されていると考えられる一方、“内的構造における証拠”と“外的変数との関連における証拠”は妥当性を一部支持する結果が得られたに留まった。今後も妥当性に関する検討を継続して行っていく必要はあるが、尺度の実用上で求められる妥当性を一定程度確認することができたと考えられる。そこで、今後、さらに本尺度の妥当性の検討を行うために必要な事項を以下にまとめる。

まず第1に、本研究で検討を行った“内的構造における証拠”と“外的変数との関連における証拠”に関するさらなる検討の必要性である。特に、既述したように“外的変数との関連における証拠”に関する検討では、認知的評価の調整効果によって仮説が支持されなかった可能性が考えられる。従って、認知的評価の影響を統制した偏相関分析を含めた検討が必要である。

第2に、本尺度の有用性に関する検討である。コーピング尺度はこれまでに多く開発されており、対人ストレス・コーピングを測定する尺度も開発されている。従って、それらの既存尺度と比較した上で、本尺度がもつ有用性について検討を行っていくことも必要であろう。

以上に示した2点の検討点を含めて、今後さらなる検討を行っていくことで尺度の妥当性を高めていくことが求められる。

引用文献

American Educational Research Association, & American Psychological Association, & National

- Council on Measurement in Education (1999). *Standards for educational and psychological testing*. Washington, DC; American Educational Research Association.
- Aldwin, C.M. (2007). *Stress, Coping, and Development. An Integrative Perspective*. 2nd ed. New York: Guilford press.
- Carver, C.S., Scheier, M.F., & Weintraub, J.K. (1989). Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 267-283.
- Endler, N.S., & Parker, J.D.A. (1990). Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 844-854.
- Folkman, S. (2011). *The oxford handbook of stress, health, and coping*. New York: Oxford University Press.
- Folkman, S., & Moskowitz, J.T. (2004). Coping: Pitfalls and promise. *Annual Review of Psychology*, **55**, 745-774.
- Furr, R.M. (2011). *Scale construction and psychometrics for social and personality psychology*. SAGE.
- 南風原朝和 (2002). モデル適合度の目標適合度—観測変数の数を減らすことの是非を中心に—行動計量学, **29**, 160-166.
- 平井洋子 (2001). 測定・評価に関する研究の動向—尺度による測定と「定型」再考—教育心理学年報, **40**, 112-122.
- 池田 央 (1994). 現代テスト理論 朝倉書店
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.
- 川人潤子・大塚泰正 (2010). 教育実習を控えた大学生の楽観性が直接的またはストレスラー、コーピングを介して間接的に抑うつに与える影響—共分散構造分析による因果モデルの検討—学校メンタルヘルス, **13**, 9-18.
- Latack, J.C., & Havlovic, S.J. (1992). Coping with job stress: A conceptual evaluation framework for coping measures. *Journal of Organizational Behavior*, **13**, 479-508.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R.S., フォルクマン, S. 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—実務教育出版)
- Messick, S. (1995). Validity of psychological assessment: Validation of inferences from person's responses and performance as scientific inquiry into score meaning. *American Psychologist*, **50**, 741-749.
- Nes, L.S., & Segerstrom, S.C. (2006). Dispositional optimism and coping: A meta analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 235-251.
- 坂本真士・田中江里子 (2002). 改訂版楽観性尺度 (the revised Life Orientation Test) の日本語版の検討 健康心理学研究, **15**, 59-63.
- Skinner, E.A., Edge, K., Altman, J., & Sherwood, H. (2003). Searching for the structure of coping: A review and critique of category systems for classifying ways of coping. *Psychological Bulletin*, **129**, 216-269.
- Somerfield, M.R., & McCrae, R.R. (2000). Stress and coping research: Methodological challenges, theoretical advances, and clinical applications. *American Psychologist*, **55**, 620-625.
- 鈴木伸一 (2004). 3次元 (接近-回避, 問題-情動, 行動-認知) モデルによるコーピング分類の妥当性の検討 心理学研究, **74**, 504-511.
- 高本真寛・相川 充 (2012). 行使意図を明確にしたコーピング尺度の開発と妥当性の検討 心理学研究, **83**, 108-116.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, **52**, 310-319.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1993). オプティミストは健康か? 健康心理学研究, **6**, 1-12.
- (受稿3月30日: 受理5月7日)